

令和 2 年度 【 学園研究費助成金 < A > 】 研究成果報告書

学部名 現代マネジメント学部

フリガナ ノザキ ユウコ
氏名 野崎 祐子

研究期間 令和 2 年度

研究課題名 超少子高齢社会における社会的孤立の経済分析

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	野崎 祐子	現代マネジメント学部	准教授
研究分担者	-	-	-
研究分担者	-	-	-

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

高齢化の進展がもたらす広範で多様な影響については、先進国のみならず発展途上国においても重要な課題のひとつである。とりわけ高齢化が及ぼすマクロ的な影響や、高齢者の subjective well-being についての関心も高まっている。このような状況を分析するには、社会構造の多面性を踏まえた学際的な視点が必要となるが、これまでのところそうした分野横断的な研究の蓄積はあまり進んでいない。本研究では、心理学の知見を援用した実証分析により、超高齢化社会における well-being 向上に向けた政策的インプリケーションを得ることを目的とする。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

予定していた『国民生活基礎調査』等公的データの個票の利用ができなかったため、計画を変更し、ヨーロッパ主要国の高齢者を対象とした「SHARE (The Survey of Health, Ageing and Retirement in Europe)」ならびに「家計と貯蓄に関する調査(ゆうちょ財団)」を用いた。SHARE については、研究計画書の審査があったため、データ入手まで時間がかかり計画進捗に遅れが出た。新たに取得したデータに年齢や地域の制約があったため、計画した 3 つの課題のうち、「社会的孤立と関連するリスクとの因果関係」に絞って分析を進めた。また、「日本老年学的評価研究プロジェクト: AGES」の定期ミーティングに参加し、高齢者の社会福祉政策や福祉分野における研究の到達点についての助言を得るなどして、研究内容のブラッシュアップに努めた。成果は 2 本の英語論文と 2 回の国際会議発表である。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究は以下の2本の論文により構成されている。

(1) 高齢化と貯蓄率：ゆうちょデータによるLCH（ライフサイクル仮説）の検証

LCHに従えば、高齢化の進展は家計貯蓄率の低下をもたらす。しかし、日本のデータを見るとマクロ、ミクロレベルの両方で2014年以降上昇トレンドに転じている。本研究はゆうちょ財団「家計と貯蓄に関する調査」3回分を用いたプールド・データを用いて、年齢と貯蓄行動との関連を多項ロジット分析による検証を行った。その結果、金融資産額や家計所得の高さは、貯蓄を促す一方で貯金切り崩しには有意に負の影響を与えていること、世帯員数の多さは貯蓄に正の効果を持つが、貯金切り崩し行動に関しては有意な結果が得られなかったこと、教育年数はいずれの行動においても影響を持たないことなどが明らかとなった。また、年齢が高くなるほど貯蓄確率が低下し、切り崩しの確率は高くなることが確認された。しかし貯蓄行動においては現状維持バイアスが正、貯金切り崩し行動においてはリスク回避が負の効果を持つことが確認された。

(2) 幸福度と年齢に関する Aging paradox の検証 (SHARE データ)

高齢者の well-being に関しては、経済学、心理学、脳科学、精神医学などから様々なアプローチがなされている。とりわけ年齢と幸福度との関連については、経済学の多くが U-shape 仮説（若い頃の幸福度は高いが、年齢を追うにつれ低下し40歳後半あたりで最低となる。それ以降は上昇に転じ、高齢期にはまた高い水準までもどるといふもの）を支持しているのに対し、心理学では否定あるいは無関係とするものがほとんどで、これまでのところ統一した見解は得られていない。本研究では50歳以上を網羅する SHARE データのうち、フランス、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、イタリア、スペインの6カ国データを用いて U-shape curve 仮説の検証を行った。その結果、幸福度と年齢との間に有意な結果は得られなかった。一方で、社会への能動的な関わりが有意に幸福度を高めることが明らかになった。ここでは、受動的な関わり方では有意な結果は得られておらず、高齢社会においては主体性が幸福度を高める鍵となることが明らかになった。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

① social relation	② longevity	③ happiness	④ Aging paradox
⑤ U-shape curve: happiness and age	⑥ social welfare	⑦ population aging	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

[学術論文] 2本

(1) Nozaki, Y. (2021). “Disentangling the saving puzzle in aging Japan -Psychological responses matter, “*Journal of Risk and Uncertainty*,” (単著・4月に投稿予定)

(2) Nozaki, Y. (2021).” Would longevity make us happier? the role of social relation on success aging, “*Journal of Happiness Studies* (単著・投稿中)

[学会発表] 2本

(1) “Would longevity make us happier? Examining the U-shape in happiness, “Midwest Economics Association (Online:2021年3月25日：シカゴ時間で3月24日)

(2) “Would longevity make us happier? Examining the U-shape in happiness, “The International Academic Forum (Online:2021年3月29日)

来年度は「日本老年学的評価研究プロジェクト：AGES」において共同研究を予定している。